



領土・主権展示館 企画展

地図・海図編纂にみる
領土・海洋認識の変遷

日本のかたちを描く



勝海舟



柳瀬悦 (やなぎならよし)

2024 2 | 6 火 ▶▶ 4 | 14 日

上から：伊能忠敬肖像（所蔵：千葉県香取市 伊能忠敬記念館）／開成所「官板実測日本地図」（1865年以前）（所蔵：東京大学文学部）／シルビア号（所蔵：海上保安庁）／勝海舟「大日本国沿海地図」（1867年）（所蔵：国土地理院）／柳瀬悦（所蔵：海上保安庁）／勝海舟（出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

ごあいさつ

本日は、領土・主権展示館企画展『日本の「かたち」を描く－地図・海図編纂にみる領土・海洋認識の変遷－』にご来場いただき誠にありがとうございます。

近年、古地図（現用ではない地図という意味で用いており、近代期の地図を含みます）をめぐる研究は大きく進展しています。

その理由としては主に二つ挙げられます。

第一には、新たな史料の発見です。2009年には東京大学の赤門書庫の改装に伴い収蔵史料の整理を行ったところ多くの未見の地図などが見つかりました。また、これまで3枚完全なセットは国内には一つしかないと考えられていた伊能小図について、2021年に個人の方が所蔵していたセットが発見されました。

第二には、国内外での史料のデジタル・データベースの整備です。特に、海外の図書館や公文書館で所蔵されている地図についてインターネットを通じて所蔵の確認、場合によっては画像まで確認できるようになったことは研究の進展に大きく寄与しました。

領土・主権、特に日本の国土※や領土をめぐる歴史に関する研究についても同様の理由で進展が見られます。地図の作製者の地理的認識は、その作製した地図に表れますので、古地図の研究と日本の国土や領土をめぐる歴史の研究には深い関係があります。

本企画展では、最新の研究成果も踏まえ、近世から近代（明治初期）にかけての日本（特に政府機関による）地図・海図編纂の歴史を紹介します。そして、地図や海図の編纂や流通過程を通じて、近世から近代（明治初期）にかけて、日本の国土／領土認識や海洋認識がどのように変遷してきたかを説明します。

その一つの実例として、各時期における日本海の島々に対する認識の変遷についての小冊子を用意させていただきました。総論としての日本の地図史と各論として竹島も関連する日本海の島々に関する認識について順を追ってみることで、領土をめぐる歴史も大きな歴史の流れの一部であることを実感いただければ、幸いに存じます。

2024年2月
領土・主権展示館

※近世以前の日本の範囲、あるいは境界に関する認識は、近代国際法上の「領土」「領域」あるいは「国境」に関する認識とは異なると考えられるので、「領土」とは別に、「国土」という用語を用いています。ここでは、「国土」は単に日本の範囲や境界にとどまらず、国の形状や島々の位置に関する認識を含むものと考えます。

（注）本企画展は、最新の研究も含めて紹介するものであり、個別の記述内容が必ずしも政府の見解を代表するものではありません。



第一章

「絵図」から「地図」へ — 明らかになる「日本」の形 —

「日本」*は、歴史上、各時代や集団、地域によってイメージや意味に差がありますが、海に囲まれた島々の集合体として認識されてきました。

江戸時代、この「日本」を描いた多くの地図（以下「日本地図」）が作られます。その背景には、印刷技術の普及に加え、経済・流通・交通の発達により地域を越えた交流が増大し、「日本」を視覚的に理解したい欲求が高まったことがありました。

第一章では、歴史的に重要な4種類の江戸時代の日本地図を紹介します。

※以下、「日本」は、地理的範囲あるいは領域としての日本を、鉤括弧なしの日本は、政体としての日本政府を指します。

国絵図 地図 1 と日本総図 地図 2

第一は、江戸幕府がその統治のため（「薩摩国」などの）令制国ごとに作製させた国絵図と、それを元に作製された日本総図です。これらは、中国や朝鮮から輸入された地図の様式や表現を踏まえつつ、中国とは異なる日本社会を視覚化しようとしたものであり、そのために独自の「国絵図記号」⁽¹⁾が発達したことが指摘されています。

(1) 杉本史子「絵図の史学：『国土』・海洋認識と近世社会」（名古屋大学出版会、2022年）27頁。

「流宣図」 地図 3

第二は、浮世絵師であった石川流宣が作製した「日本海山潮陸図」（1691年）に代表される絵図です。17世紀末、出版文化と旅行文化が成熟し、「日本」内の各地域への関心が高まるなかで誕生したいわば「観光案内図」です。日本列島の形の正確さを追求したものではありませんが、絵なども使って多くの地理情報を掲載し、鑑賞者の関心を満たすものとして、百年近く流通するロングセラーとなりました。

「赤水図」 地図 4

第三は、「赤水図」です。「美しさ」や「楽しさ」が重要視された絵図に対して、18世紀中盤、「正しさ」を追求した地図が登場します。特に、1780（安永9）年に大坂で出版された長久保赤水「改正日本輿地路程全図」は、赤水の没後も版を重ね、明治初期まで市井の人々に信頼できる地図として受け入れられ、「日本」の形について一定の共通認識を人々に与えることになりました。

「伊能図」 地図 6

第四は、我が国初の全国実測図である伊能忠敬「大日本沿海輿地全図」です。18世紀末、日本列島周辺ではラクスマンの来航（1792年）やブロートンの測量航海（1795-1797年）など外国船の来航や測量が行われます。また、ロシアとの接触により蝦夷地は有限であり、その先にロシアなどの「異国」が存在することが意識されました⁽²⁾（地図5）。江戸幕府は、「日本」の海岸線を把握する必要性を認識し、百姓身分出身であった伊能忠敬に蝦夷地を測量させるという天文方高橋至時の異例の提案を試し測量という形で許します⁽³⁾。伊能忠敬は、「日本」全国の統一的測量を、1800（寛政12）年から1816（文化13）年までの17年かけて実施し、その死後の1821（文政4）年に地図が完成しました。

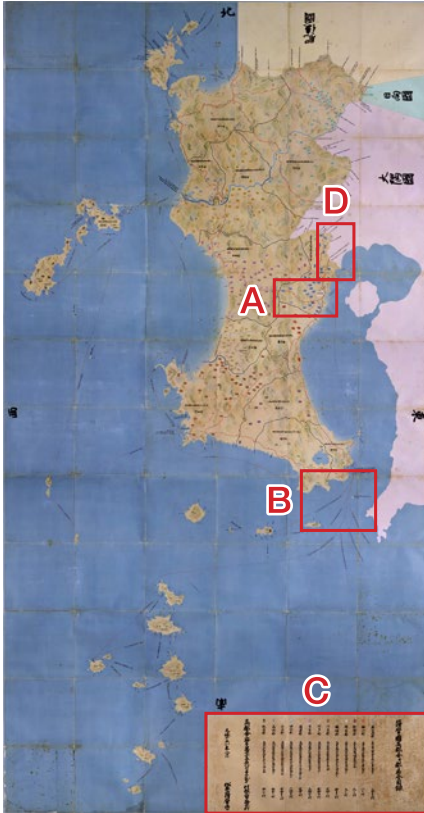
(2) 谷本晃久「近世蝦夷地在地社会の研究」（山川出版社、2020年）87、101、124-134頁。

(3) 杉本史子「『伊能忠敬とその時代』の解明のために」平井松午編「伊能忠敬の地図作製」（古今書院、2022年）。

1 国絵図と日本総図 ―江戸幕府の下の秩序を視覚的に表現―※

地図 1

「元禄国絵図薩摩国」(1702年)と「国絵図記号」



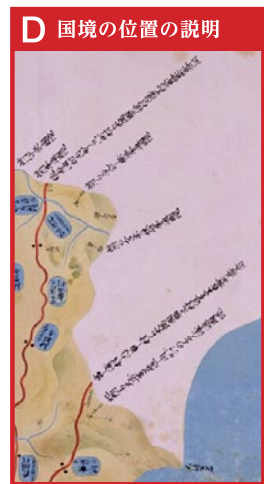
所蔵: 国立公文書館 781×414cm



港の広さ・深さ・収容隻数
琉球国への航路及び方向



提出年月・提出者: 元禄15年8月
松平薩摩守(島津吉貴)



地図 2

「享保日本図」(1785年)



所蔵・画像提供: ふくやま草戸千軒ミュージアム(広島県立歴史博物館)
「松浦静山旧蔵日本全図(「享保の日本図」)」(守屋壽コレクション)
152×336cm

8代将軍吉宗の時代に作製。国絵図をベースに、全国203の観測地からの方向データを元に作製されたそれまでより精度の高い日本地図。2014年にその測量原図が、個人寄託の古地図群から発見されました。

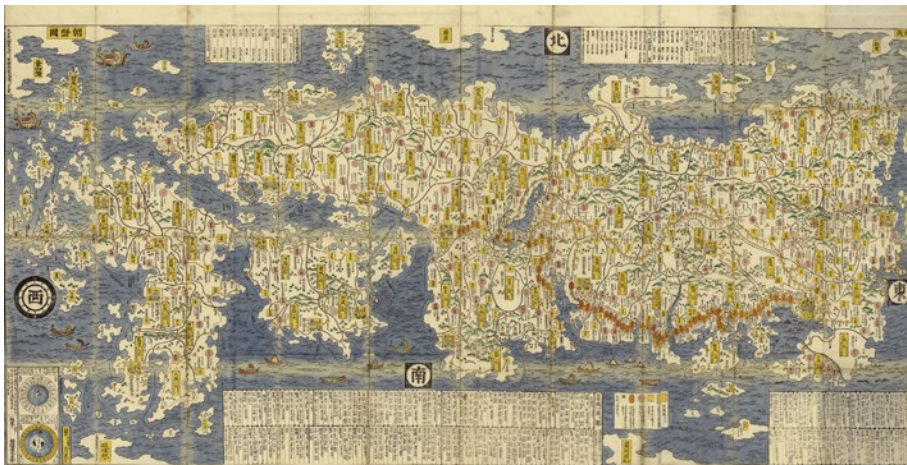


※この頁は、杉本史子「絵図の史学: 「国土」・海洋認識と近世社会」(名古屋大学出版会、2022年)の「第1章 アジアのなかの政治地図: 国絵図と日本図」を主に参照して作成しています。

② 「流宣図」から「赤水図」へ —「美しさ」から「正しさ」へ—

地図 3

いし かわ とも のぶ に ほん かい さん ちょう りく す 石川流宣「日本海山潮陸図」(1691年)



所蔵: 国土地理院 97.2×170cm

石川流宣は江戸の人で、初代板元も江戸でした。このため、江戸発着の主要街道の里程が記載されたり、東海道の駄賃が示されるなど江戸の人々には有用な情報が記載されていました。しかし、西に行くほど情報が減り、畿内より西に記載される神社は厳島神社だけであり、なおかつ絵だけで名前は記載されていません。



小冊子「人物と機関」
石川流宣



伊勢志摩(現在の三重県)周辺

地図 4

なが く ぼ せき すい 長久保赤水「改正日本輿地路程全図」(初版)(1780年)



所蔵: 高萩市歴史民俗資料館 82×132cm

「改正日本輿地路程全図」は、長久保赤水の長年にわたる情報収集により驚くべき正確性を備えています。同図には経緯線が描かれています。緯度は記載がありますが、当時の日本では、経度を知る方法がほとんど普及しておらず、京都を中心に東西に展開する線となっており経度は記載されていません。



小冊子「人物と機関」
長久保赤水



小冊子「日本海の島々の認識の変遷」

③「伊能図」―外国船の来航と我が国初の全国実測図―

欧米では、18世紀後半から19世紀前半にかけ、クロノメーター（精巧な携帯用ぜんまい時計）と月距法（月と太陽などそれ以外の天体の間の角度に注目する経度測定法）の発明と普及、蒸気船の発達などにより海洋の確実な測量、計画的な移動が可能になります。そして、欧米の船が世界中を航海・測量するようになり、日本列島周辺にも出沒し、海上から測量を行います。また、ロシアの植民は、18世紀末、択捉島の隣のウルップ島まで南下・進出してきました。

江戸幕府は一時期、蝦夷全体を幕府領にし、択捉島で漁場や航路の開発、アイヌの撫育や郷村制の導入を進めるなど、ロシアの南進に備えるため、北方四島を含む蝦夷の支配を固めました。

また、外国船が海上から行う測量を懸念し、海岸線の把握のため、伊能忠敬の全国測量（地上からの海岸測量）を許可しました。

地図 5

近藤重蔵「蝦夷地図式 乾」（1802年）



所蔵：函館市中央図書館 92×75cm

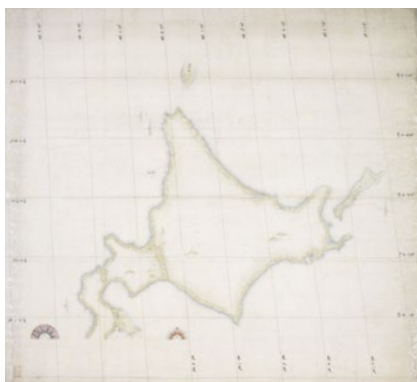
近藤重蔵「蝦夷地図式」は乾坤の2つあり、乾は蝦夷地を描き、坤はウルップ島より北の千島列島を描いています。坤は、択捉島まで交易のため来島していた千島アイヌから情報を得て作製された図で「チュプカ諸島図」とも呼ばれます。

江戸幕府は、近藤の献策により、ウルップ島以北の千島アイヌの択捉島への交易のための来島を禁止しました。その結果、ウルップ島に入植していたロシア人は千島アイヌ経由で食料など必要物資を確保することができなくなり、ウルップ島から撤収しました。

小冊子「人物と機関」
近藤重蔵

地図 6

伊能忠敬「日本国図（日本沿海輿地図（小図）） 蝦夷地」（1821年）重要文化財



所蔵：東京国立博物館 Image:TNM Image Archives
(蝦夷地) 161.4×178.1cm

小冊子「人物と機関」
伊能忠敬